生徒の言語能力を高めるために
言語技術を取り入れた中学校国語科の授業実践

高度学校教育実践専攻教職実践高度化系
学習指導力開発コース
石　丸　　由　香　里

実習責任教員　金　児　　正　史
実習指導教員　皆　川　　直　凡

キーワード：言語能力，言語技術，授業改善

１　問題の所在と本研究の目的

1-1　問題の所在

筆者の授業実践を振り返ると，主体的で対話的な授業の実現がされず，「聞く」「話す」「読む」「書く」の４技能を柔軟に活用した学習指導が十分にできていなかったことや，筆者の母語に対する認識の甘さが要因となって，生徒の言語能力の十分な育成につながっていなかったことが課題として見えてきた。

令和２年度三重県学力調査の国語の分析結果から，実習校の生徒は文章や資料から情報を取り出して活用しながら的確に読み取ること，読み取ったことを基に自分の考えを表現することに課題があることが明らかになった。これらの事実から実習校の生徒は，読むことと書くことの資質・能力が不足していると考えた。

中央教育審議会「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」(2016)では，言語能力を育成する資質・能力を，言葉に関する知識・技能や態度を基盤に「創造的・論理的思考」「感性・情緒」「他者とのコミュニケーション」の側面を働かせて，テクスト（情報）を理解したり，文章や発話により表現したりする能力と整理している。さらに，テクスト（情報）を理解するための力が「思考から表現へ」，文章や発話により表現するための力が「思考から表現へ」という過程の中で働くことを示している。この過程の繰り返しは言語活動を通じて行われるため，生徒の言語能力の育成を図るには，発達段階に応じた言語活動の充実が必要である。そこで筆者は，「情報を取り出し，精査・解釈しながら理解したうえで，自分の考えを形成する力」と「表現する内容，構成を検討して自分の考えを形成・深化させ，文章や発話により表現する力」の育成を図るための有効な授業実践について研究し，言語活動を中心に据えた授業の実現を目指すことにした。

1-2　本研究の目的

本研究の目的は，実習校の生徒の課題である，読むことと書くことの資質・能力の育成を目指す国語科学習指導案の作成，及び，その授業実践について，読むことと書くことの資質・能力の向上に寄与する授業が実現できたかどうかを評価し，実践授業の成果と課題について考察することである。

1-3　本研究の仮説

日本の学校教育における言語技術の実践研究を行う三森は，我が国における言語技術の育成に焦点を当て，学習者の言語技術を育成することで，読解力と表現力を育成する研究を実践している。そこで本研究の目的を具現化するため，研究仮説を，「読むことと書くことを核に据えた授業に，言語技術を取り入れるならば，生徒は学習過程で獲得した知識と経験を結び付

けながら，文章を的確に理解したうえで自分の考えを形成し，それを言葉で表現することができるようになるだろう。」とした。

2　本研究の方法

（1）自分の授業実践を振り返るとともに，実習校の生徒の課題を明確にする。
（2）本研究の目的と研究仮説を明確にする。
（3）中学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編を用いて，国語科の目標や，読むことと書くことにおける各学年の目標，内容，内容の取扱いを確認する。そのうえで，各単元や各時間の目標を作成する。
（4）言語技術に関する先行研究を調査する。
（5）課題解決のため，言語技術を取り入れた国語科学習指導案を作成する。
（6）国語に関する意識調査や表現力調査問題を作成し，事前調査を実施する。
（7）学習指導案に沿った授業を実践する。
（8）国語に関する意識調査や表現力調査問題の事後調査を実施する。
（9）表現力調査問題や授業における生徒の反応等を分析する。
(10) 情報を取り出して精査・解釈しながら理解できたか，理解したことを基に構成を踏まえて自分の考えを表現できたかに焦点を当てて考察し，研究仮説の検証を行う。
(11) 生徒の読むことと書くことの資質・能力の向上が図れたか，実践授業を考察する。

3　言語技術の先行研究

3-1　言語技術（Language Arts）教育

世界各国では，言語技術（Language Arts）という教科・科目があり，社会で生きていくために必要な言語の技術が訓練されている。三森（2013）は，言語技術を「思考と表現の方法論を具体的なスキルとして指導する総合的な体系（p.6）」であり，「発達段階に応じて，情報の取り込み(読むこと・見ること・聞くこと)，思考(批判的・論理的・分析的・多角的・創造的思考)，表現(話すこと・書くこと)などのスキルを体系的，かつ具体的に指導する（p.7）」と定義している。

3-2　言語技術の先行実践例

宮城県の私立聖ウルスラ学院英智小・中学校では，三森の指導のもと，言語技術教育の実践を行っている。成果として，自分の考えを筋道立てて順序よく説明したり書いたりすることや，自分の考えを理由や根拠をはっきりと示して説明したり書いたりすることが定着してきていることなどが報告されている。筆者は，三森が実践する言語技術の指導内容を援用し，言語技術を取り入れた授業を実践することで，実習校の生徒の課題である国語科としての読むことと書くことの資質・能力の向上を目指すだけでなく，国語科で獲得した知識や技能を，他教科等の授業をはじめ，さまざまな場面で生徒が有効に転移して活用できるような，言語活動の充実を図ることを目指すことにした。

4　学習指導案の概要と授業の実際

実習校の中学校1年生88名を対象に，実施計画に沿って授業を行った。

4-1　説明文の授業における言語技術の視点

説明文の授業に，言語技術の指導内容として問答ゲームと要約を取り入れることにした。
【問答ゲーム】生徒が意味段落の役割を意識して説明文の構成を捉え，文章を的確に理解できるようになったり，自分の考えをわかりやすく書くことにつながったりするだろうと考えた。
【要約】生徒が情報の取り出しや活用方法を習得し，目的に応じて文章を的確に理解できるようになったり，さらに情報を活用しながら自分

の考えを形成し，それを文章化できるようになったりするだろうと考えた。

4-2　説明文の学習単元と各授業の学習内容

説明文の学習単元では，導入として，生徒が小学校６年生で学習した教材「笑うから楽しい」を利用した授業を行い，中学校１年生の教材「ペンギンの防寒着」と「クジラの飲み水」を利用した授業へつなげた。「笑うから楽しい」と「ペンギンの防寒着」の授業では，意味段落の役割や序論・本論・結論の構成など，説明文を理解するために必要な知識を学習し，説明文を的確に理解するとともに，自らの考えを形成する機会を設けた。「クジラの飲み水」の授業では，先の２教材で学習した知識を生かして，説明文を的確に理解したうえで自らの考えを形成し，それを文章化する実践を行った。

５　本研究における読むことと書くことの分析と考察

説明文の授業では，読むことを「読むことＡ」と「読むことＢ」に分け，「読むことＡ」「読むことＢ」「書くこと」の３視点を関連づけた指導を行った。「読むことＡ」は「笑うから楽しい」の授業で，意味段落の役割を意識して説明文の構成を捉えることと，構成を踏まえて読むことで作者の主張を的確に捉えられるようにした。「読むことＢ」は「ペンギンの防寒着」の授業で，「笑うから楽しい」の授業の既習事項を生かし，情報を取り出して整理し，活用することで，自分の考えを形成することができるようにした。また，「書くこと」は「クジラの飲み水」の授業で，「読むことＡ」と「読むことＢ」で身に付ける知識と経験を前提として，文章を読んで理解したことを基に，自分の考えとその根拠を文章化できるようにした。

以上のことから，読むことと書くことに核を据えた授業の総括的な分析ができる「クジラの飲み水」の授業に限定して分析・考察を行う。

5-1　「読むことＡ」の分析と考察

生徒は，「笑うから楽しい」「ペンギンの防寒着」の授業で学んだ，説明文を構成する序論・本論・結論には，意味段落として主張・根拠・再主張を示す役割があるという知識を自ら生かし，段落相互の関係を考えながら必要な語や文を見付けて，「クジラの飲み水」の序論，本論，結論を捉えていた。

5-2　「読むことＢ」の分析と考察

生徒は，序論・本論・結論を確定する場面や作者が示す根拠の数を明確にする場面で，「笑うから楽しい」「ペンギンの防寒着」の授業で学んだ，意味段落の役割や情報の整理と活用の仕方の知識を自ら生かし，取り出した情報を整理，活用して自分の考えを明確に示していた。

5-3　「書くこと」の分析と考察

生徒は，原文にある 17 段落に続く段落を残すべきか，残すべきではないかという課題に対して，読むことの授業での知識と経験を生かし，構成を考えて，情報を整理，活用しながら自分の考えを文章にまとめていた。多くの生徒は，文章から読み取ったことを基に，自分の主張に関連する内容を根拠として記述していた。

このことから，生徒は，これまでの読むことの授業での既習事項を生かして，説明文の構成を踏まえ，必要な情報を取り出して情報と情報の関係を捉えたうえで，自分の考えを書くことができたと考えた。

5-4　「クジラの飲み水」の授業の考察

生徒が，説明文の構成を踏まえて文章や資料の内容を的確に読み取ることができるようになったり，目的や条件に応じて必要な情報を取り出し，整理して活用することで，自分の主張と

それを支える根拠を示すことができるようになったりした。さらに，友達と考えを共有したことで，自分の考えを相手にわかりやすく伝えることへの意識を高め，主張・根拠・再主張の構成の重要性を認識できるようになった。

一方，生徒が情報を的確に取り出して活用することや，主張・根拠・再主張の構成を活用するところまで至っていないこと，また，生徒が互いの考えを話し合ったり議論し合ったりする場を多く取り入れることができなかったことが課題として残った。

６　本研究の成果と課題

6-1　本研究の成果と課題

本研究の説明文の授業実践では，言語技術の指導内容として問答ゲームの主張・根拠・再主張の型，要約の情報の取り出しと活用の方法を取り入れ，読むことと書くことを関連づけた授業を実践した。そこから見出された本研究の成果は，次の３つである。１つめは，生徒が文章を的確に理解できたり，自分の考えを言葉で表現できたりするようになるためには，読むことと書くことを関連づけた授業に，問答ゲームや要約の指導内容を取り入れた授業を実践することが有効であると気付けたことである。２つめは，自分の考えを形成・深化させようとする主体的な生徒の姿を，授業のあらゆる場面で確認できたことである。３つめは，自分の考えをもつことや，それを言葉で表現することに対する生徒の変化を捉えられたことである。

以上の成果から，本研究における研究仮説は，限定的に検証できたと考えている。

一方，本研究の課題が２つ見出せた。１つめは，生徒が自ら言語技術を意識して活用できるようになるまでに至っていないことである。生徒が授業で獲得した言語技術を，効果的に活用できるような授業を実践する必要がある。２つめは，教科の枠を超えて言語活動を充実させ，生徒の言語能力の育成を図るような授業が実践できなかったことである。国語科で獲得した知識や技能を，さまざまな場面で生徒が有効に活用できるように，他教科等との連携を意識した授業の実践を目指していくことが必要である。

6-2　今後の展望

物語の授業では，言語技術の指導内容として「物語の構造」を取り入れた授業を実践した。アンケート調査の分析結果から，９割以上の生徒が物語を学習するうえで役立つと回答した。さらに，物語の構造に関する調査問題の分析結果から，７割程度の生徒が根拠を示して物語の構造を捉えられていた。また，授業では説明文の授業で獲得した知識や技能を活用する生徒の姿が見られ，説明文の授業で学んだことが物語の授業に結び付いていることが窺えた。

以上のことから，物語の授業実践においても言語技術を取り入れた学習指導を行うことで，生徒の言語能力の向上を図ることができるという方向性を見出すことができたと考えている。

物語の授業の考察と，６－１の課題を受けて，今後は３つの課題に取り組みたい。１つめは，目的に応じて生徒が多様な言語技術を効果的に活用できるように，さまざまな言語技術の学習指導を取り入れた授業を実践し，有効性を検証していくことである。２つめは，生徒の読むことと書くことの資質・能力の向上を図るため，授業で身に付けた知識や技能を有機的につなげられるような授業展開や教材開発の研究を深めていくことである。３つめは，生徒の言語能力の育成を図るため，筆者自身が教科横断の視点をもって，授業を構想できるように授業改善を行い，実践していくことである。